**聖霊降臨節第14主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年8月18日**

**「神を知る」**

**イザヤ書42章5節**

**42:5 主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ／地とそこに生ずるものを繰り広げ／その上に住む人々に息を与え／そこを歩く者に霊を与えられる。**

**使徒言行録17章16～34節**

**17:16 パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。**

 **17:17 それで、会堂ではユダヤ人や神をあがめる人々と論じ、また、広場では居合わせた人々と毎日論じ合っていた。**

 **17:18 また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」と言う者もいれば、「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」と言う者もいた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。**

 **17:19 そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。**

 **17:20 奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ。」**

 **17:21 すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。**

 **17:22 パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。**

 **17:23 道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。**

 **17:24 世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。**

 **17:25 また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。**

 **17:26 神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。**

 **17:27 これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。**

 **17:28 皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。**

 **17:29 わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。**

 **17:30 さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。**

 **17:31 それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」**

 **17:32 死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。**

 **17:33 それで、パウロはその場を立ち去った。**

 **17:34 しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた。**

1.

 **パウロの第2次伝道旅行はギリシアのアテネに進みました。先週共に読んだ聖書箇所の終わりの方を読みますと、ベレアの町にわざわざやってきたテサロニケのユダや人たちの迫害により、ベレアのキリスト者たちがパウロを助けるためにアテネに連れて行き、そしてキリスト者たちはベレアに帰りました。シラスとテモテはベレアに残り生まれたばかりのベレアの教会の指導をしたのでしょう。ですからパウロは見ず知らずの土地であるアテネに一人で立ったのです。**

**アテネと言いますと、2004年にオリンピック・パラリンピックが開催された都市であると共に、オリンピック発祥の地であり、第一回の近代オリンピックが行われた場所です。また、パルテノン神殿がありギリシア哲学やギリシア神話の中心地であります。そもそも「アテネ」という地名がギリシア神話の女神である「アテナ」に由来すると言われています。**

**そのような、知を愛する哲学が盛んで知識人が多くいるところであり、異教の神々が崇められ祀られるアテネにパウロは一人で立ったのです。パウロの目にはアテネの町はどう映ったのでしょう。**

**「パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。」と16節に書かれています。当時アテネの人口は約5000人、一説によるとアテネの人口以上に神々の像がいたるところに立てられていたと言われているほどです。パウロは異教の神々の偶像をみて憤慨するのです。そしてここにもあるユダヤ教の会堂で教え、広場ではアテネの人たちに福音を宣べ伝えたのでした。エピクロス派やストア派と呼ばれる哲学者たちはパウロの語る福音に興味を示してアレオパゴスという裁判所のようなところの小高い丘にパウロを連れて行き「もっと話をしてくれ。私たちはあなたの話を聞きたい」と促したのです。ただ、彼らの姿勢というのは純粋に神を求め福音を求めるというのではなくて、21節に**

**「すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。」**

**とありますように。何か目新しい話を聞いて知識が増えて知的好奇心が満たされればそれでいいというものでした。**

**そのようなアテネの人たちにアレオパゴスの真ん中でパウロは説教をするのです。「アレオパゴスの説教」と呼ばれているものです。その説教で印象的な言葉が23節の「知られざる神に」という言葉です。「知られざる神」とは「まだ誰も知らない神」とか「知られていない神」という意味です。**

**アテネの人たちは知的好奇心旺盛です。何か新しいことを知りたい。「知る」ということに喜びを感じています。そして、それと共に多くの神々の像を自分たちの手で作って拝むということをしていました。何か相いれないもののようですが、その根底にあるのは不安や恐れと言えるのです。例えば、死の不安、人間死んだらどうなるのか、その不安や恐れをなくしたいがために死や生について考え、議論して、学ぶことでその不安や恐れを取り除こうとするのです。そして多くの神々の像をたくさん作り出しそれらを拝むことで目に見える安心を得て、不安や恐れを取り除こうとするのです。ただ、もしかしたらまだ知らない神がいるかもしれない、その神を拝まないとその神に失礼を働いてしまい、その神が怒って災いをもたらすかもしれない、だから何かは知らないけれどもその神様も拝んでおこうと「知られざる神に」と祭壇を築いて拝んで安心を得ているのです。**

**パウロはアテネの人たちが「知られざる神」と拝んでいる神がどのような神であるかをこの説教で語るのです。その神は何よりも天地万物を造られた造り主なる神である。造り主であるので人間が造った神殿にも像にもお住みにならないし、人間が何かお世話をする必要もないのです。造り主なる神は私たち人間をお造りになられこの世界のいたるところに住まわせられ、季節を決めて、居住地の境界線をお決めになりました。**

**そして27節でこのように言います。**

**「これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。」**

**人が神を求めて探し求めるならば神を見出すことができるようにしてくださっているし、わたしたち人間の近くにいてくださる。それなのにアテネの人たちは人間が造り出した偶像を拝むことで満足して不安や恐れを解消してしまっている。つまり神を探して求めてないし、神を知ろうとしていない。**

**それをパウロは30節で「無知な時代」と批判しました。アテネの人たちは知識人であることを誇るけれども、神に対して「無知」である。神を知ろうとしない、神を求めずに自分たちで作りだした偶像を拝んで不安を解消してしまっている。そして神に対しての「無知」これこそが聖書が言う「罪」であるのです。「罪」だからこそ神様は悔い改めを求めるのです。**

**造られた者が造った者を知ろうとしない、自分の手で造ったものを勝手に神として拝んでいる「神様を求めさえすれば、神様を見出すことができるのに」それをしない、そこに「無知」という「罪」があるからこそ、神様に造られたものが造り主に立ち帰る、その悔い改めを神様は求めているのです。そしてそれこそがイエス・キリストの十字架の死と復活なのです。イエス・キリストの十字架の死とその死からの復活によって神様が罪を赦して下さった確証を与えて下さっている、その神を知り、神を信じなさいとパウロは説教を結ぶのです。**

**パウロが語る「無知な時代」は今の私たち、とりわけ日本の社会がそれにあたると思うのです。戦後の混乱期から高度経済成長やバブル経済を経て日本は経済的には豊かな国になりました。技術の進歩は目覚ましく、ものに溢れている世の中です。スマートフォン一つで何でもできるようになりました。ただそうやって技術やモノがあふれるようになればなるほど、人は神様から離れていくのです。神様なしで生きられると思い込み、自分が神様につくられた存在である被造物にすぎないという大事なことを忘れてしまうのです。**

**それでいて、日本は八百万の神々の世界です。「イワシの頭も信心から」なんていうことわざがあるくらいに、何でもかんでも神様にしてしまいます。商売の神様、家内安全の神様、水の神様、火の神様、石の神様、多くの神々をまつることで不安や恐れを取り除こうとするのです。若い人たちの間でパワースポットめぐりが流行ったり、御朱印巡りがはやるというのは、やはり物質的なものでは満たされない、恐れや不安があるのではないかと思うのです。**

**そうかといって本気で神様を求めて救いを求めて、つまり神様を知ろうと真剣に生きる生き方をする人を「ダサい」とか「怖い」というのも事実です。新興宗教による集団テロ事件があり、不安に付け込んで大金を巻き上げる宗教への批判があり、「宗教2世」なんて言葉も流行りました。神様を知ろうとすることはダサくて怖いからしない、だから目に見える何か、安心できる何かで不安や恐れを解消している、それはつまりそういったものを偶像として拝んでしまっているのです。でもそれでは本当の意味で不安や恐れは解消しない、解消した気になって普段は考えないようにして偶像に囲まれて生きているのです。「知られざる神」は人々が「知ろうとしない神」ということができるのです。**

**それはまさにパウロが言う「無知な時代」であり、アテネの人たちの姿はこの日本に住む人たちの姿であり、決して日本だけの問題ではないのでしょう。「どこにでもいる人でも皆悔い改めるようにと命じておられます」と30節でパウロが言うように、どこにでもいる人に当てはまる問題ですし、どこにでもいる人でも皆に神様は悔い改めることを求めておられるのです。一人でも多くの人が神様を知って欲しいのです。造り主である父なる神様に立ち帰り、イエス・キリストの十字架の死と復活を信じて歩んで欲しいのです。**

**だからこそ、神様はこの世界に教会をお立てになり、イエス様の十字架と復活を宣べ伝え証しするように、使徒たちを用いて下さり、パウロを用いて下さり、さらには悔い改めてイエス様の十字架と復活を信じ歩む私たちを豊かに用いて下さるのです。**

**この後歌う讃美歌277は「赤毛のアン」を翻訳された村岡花子さんが訳詞をされた讃美歌です。村岡花子さんは10年ほど前の朝ドラ「花子とアン」の主人公のモデルとなった人です。その村岡さんがイエス様を信じる信仰からこの讃美歌の訳詞が生まれました。**

**わがたまをいつくしみて　追いもとめ救いたもう**

**たぐいなき主のまことは　とうときかな。**

**「アーメン」本当にその通りだと思います。主の真、主の愛といってもいいでしょう。それがどんなに尊いことか、この歌詞は救われて信仰に生きる喜びを証していると思います。そして、その喜びを一人でも多くの人に伝えたいとの思いをこの讃美歌を歌う私たちも心に留めて、私たちもイエス様の十字架と復活の愛によって生かされている喜びを伝えていきたいと思います。**

**私たちがどんなに伝えても、パウロが経験したように嘲笑う人や「いずれ聞かせてもらうよ」と聞こうとしない人たち、神様を知ろうとしない人たちがいるでしょう。けれども、アレオパゴスの議員ディオニシオやダマリスという女性やその他数名が悔い改めて信仰へと導かれました。たとえわずかであっても信仰へと導かれる者がありました。わずかであっても、一人でも多くの人が救われるようにイエス様の十字架と復活を、その愛によって生かされている喜びを宣べ伝えていきたいと思います。**